
ロリコンとはかくあるもの

エネゴリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコンとはかくあるもの

【Nコード】

N8830Z

【作者名】

エネゴリ

【あらすじ】

事あるごとに無駄に深く考えて自分の世界に没入してしまう悪癖のある「俺」。

普段の生活のなかで、我々は意識する事はないだろうが、電車の中というものは、いわゆる日常の対概念である非日常の場として存在している。非日常とは、日常から隔絶した異質で異様な世界のことである。こと電車における非日常性は、その物理的な要因による空間の閉鎖性と、公的な交通機関という特質による人間の凝集性および差異性によってもたらされる。

電車が一度走り出すと、たちまち密室が成り立つことは簡単に理解できるだろう。停車しない限り走り続けるため、扉は安全のために閉ざされるようになっていく。この電車の密室を利用した殺人事件は、現実には起きていくかどうかは別にせよ、推理小説ではお馴染みのものだ。

その逃げ場のない閉鎖的空間に、名も知らぬ人間が、老若男女を問わず集まっている。これは、電車が交通機関として機能しているからに他ならない。彼らは、ただ同じ方向に進むという理由のみによって同席しているのだ。そこには、他に何らの共通性を見出すことはできない。

以上に指摘した要因から、ひとつの結論を導き出すことができる。それは

「お前さつきから何ブツブツ言ってるんだよ」

俺の隣に座っている男、木村が言う。

「いや、電車っているんな人がいるよなって思ってたさ」

俺の回答に、肯定も否定も窺えないような微妙な頷きを返す木村。自分の考察に自信を持っている俺は木村に問い質す。

「納得できない？」

「まあね。だってそれはどこでだって言えることじゃん。街中だっているんな人がいるよ。同じ人なんて一人として居りゃしない」

「ああ、舌足らずだった。たしかに電車以外でもいろんな人がいるよ。それこそ君の言うとおり同一の人間なんか存在しえない。でもね、電車というのは、そこに逃げ場がないことと、凝集の度合いが高いことが他の空間とは一線を画していると思うよ。電車において他にはないはずだ」

さらなる反論に身がまえた俺だったが、木村は追及するのが面倒くさくなったのか、無言で携帯電話を弄りだした。喧嘩するつもりはなかったのだが、気まずい雰囲気になってしまった。

……

沈黙をかき消すように電車のガタゴトという音が大きくなり始める。そんななか、一組の男達の会話がやけに耳についた。

「うはは、ロリ最高」

「いえーいつるぺた最高。ひゃひゃ」

人は見かけによらないものだ。彼らは今時の若者といった出で立ちで、率直に言つて異性にもてそうだ。周囲に聞こえないようひそひそ声で喋っているようだが、しかし、そうした囁きというものはかえって音が高くなるために、目立つのである。そもそも話の内容からして周囲から浮いているのは間違いない。意識せずとも俺は彼らの話を聞くことになる。それは木村も同じで、携帯を弄る手が止まっていた。

「幼女最高。うはは」

「つるぺたつるぺた。うひゃ」

「つるぺた。幼女幼女幼女」

「つる、ぺた。幼女」

「ひゃひゃひゃ」「うはははロリロリ」

どうやら彼らは「幼女」「ロリ」「つるぺた」という単語のみで意志疎通を行える新人類らしい。終始そんな調子のまま、やがて二人

は目的地に着いたらしく降車していった。そのときである。沈黙を守っていた木村が突然、口を開いた。

「たしかに、いろんな人がいるな。お前の言うこと、よくわかった」理由がどうであれ、緊張した空気が戻って何よりだ。

「だろ。しかしあれだな。最近はロリコンが多いね」

「そうだな」

つるぺたというのは胸部の隆起が確認されない状態、つまり乳房の未発育段階のことを指しているものと考えられる。換言すれば、男女の性差が生じていない時期ということだ。したがって彼らの口にする幼女という概念は、第二次性徴期前の女性を指すものと考えられる。年齢にしておよそ、7〜11歳だ。

近年、以上に示したような幼女を性愛の対象とする若者が増えていく。いや、正確には自称している若者である。彼らが本当に幼女を愛しているのかどうかは定かではないが、近年はその数が尋常ではない。俺はそのことに猜疑を抱かずにはいられない。なぜなら前述の定義に該当する時期は小学校低学年である。低学年の児童に性欲を抱くのは明らかに倒錯した性状と言って差し支えない。表現を緩やかにする必要もない程の異常者だ。

一般的な理性と常識を持ち合わせていれば、そのような異常な性癖を、小声にせよ公然と口にすることは人として間違っていると判るはずである。ロリコンは指弾されるべき存在でしかない。にもかかわらず、最近はやれ「幼女」だ「ロリコン」だ「つるぺた」と言ったことを平気で話題に上らせる手合いのなんと多いことか。これは、彼らが生来のロリコンではないことを如実に表わしている現象といえよう。彼らの言う「幼女」は實際上の生身の人間を指しているのではなく、もっと概念的で記号的な

「またか。今度は何考えてたんだよ」

また自分の世界に入り込んでしまった。俺の悪い癖である。

「ああ、ごめんごめん。ええと、さつきロリやら幼女やらつるべたやら言ってた人達がいたよね？」

「いたね」

神妙な面持ちで頷き返す木村。そのまま至って真剣な眼差しで俺は話を続ける。

「彼らは本当に幼女が好きなのかなと思って」

「どうだろうね。つるべたって言ったら、本当にちっちゃい子ってことになるけど、そんなひといるのかなとは思う」

「だよな。俺ら以外には見たことないし」

「うん。会ったことないよね」

「ぶ」

「はははははは」「はははははは」

抑えていた笑いが同時に弾けたとき、ちょうど乗車中の電車が目的の駅へと到着した。

「あ、ついた」

「行くかあ」

「お前今日の担当誰？」

「小2の有紀ちゃん」

「いいなあ」

「へへ」

「俺今日男児だし。まあ明日は朱里ちゃんだけど。へへ」
俺と木村は、勤務先のとある英語塾へと歩き始めた。

電車の中という場所には、実に様々な人間がいるものである。

（後書き）

どうでもいいことですが僕は電車が嫌いですwとくに満員電車はぎゆうぎゆうでいやんなっちゃいます（UU）〃3はあ

なので電車を舞台にしたホラー書こうと思ってこうなりました！純粹なホラーとは違いますがこういうのも恐ろしいかなあ〜と思いますせんか！？

直接的な描写はないですが一応R15ですん。
エロいの期待した方ずびばせん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8830z/>

ロリコンとはかくあるもの

2011年12月27日21時48分発行